

## P2-057

## 慢性疾患を抱えて小児専門病院の内分泌・代謝科に通院している青年の属性に関する実態報告

瀬尾 真千子<sup>1</sup>、堀川 玲子<sup>2</sup>、金築 優<sup>3</sup><sup>1</sup> 聖路加国際大学大学院看護学研究科 博士後期課程<sup>2</sup> 独立行政法人 国立成育医療研究センター 内分泌・代謝科<sup>3</sup> 法政大学現代福祉学部 臨床心理学科

## 【目的】

小児慢性疾患特定疾病情報センターの登録情報の集計結果によると、平成11年からの疾患群ごとの登録数は毎年3万人前後が内分泌疾患である。内分泌疾患を発症する子どもは多く、成人になってもセルフマネジメントやセルフコントロールが必要になる。本研究は20歳を超えて小児専門病院の内分泌・代謝科に通院している患者の属性の実態報告することを目的とする。

## 【方法】

2011年7月20日～10月5日個人自記入式質問紙調査を行った。首都圏にある小児専門のA病院の内分泌・代謝科外来に通院している慢性疾患患者のうち、1) 現在内分泌疾患に罹患し診療を受けている、2) 研究に参加する時点での年齢が20歳以上である、3) 患者を担当した診療科責任者から、研究協力の同意が得られている、4) 本人の研究参加同意が得られる、5) 日本語の読み書きの理解ができる、6) アンケート調査の郵送に同意する意思表示がある、の選択基準を満たし、研究参加の同意を得られた研究協力者を対象とした。属性に関する質問項目は、性別、年齢、最終学歴、職業、診療科、病名、発症年齢、通院期間、現在の服薬状況とした。本研究は、A病院の倫理審査会(承認番号485)および帝京平成大学大学院の倫理委員会(承認番号3)で承認を得た。

## 【結果】

有効回答者数は129名であり、平均年齢は30.8歳で、女性66.7%であった。最終学歴は高校37.2%、大学25.6%の順であり、48.1%は会社員で、診療科は内分泌科のみが77.5%だった。病名は研究協力者が記述した病名とし、複数の病名を持っている人が7名おり、病名に対して人数加算をし、一番多かったのは1型糖尿病19.4%だった。発症年齢、通院年数について複数ある場合は一番低年齢の方を採用し、0歳での発症が一番多く30.2%、平均通院年数は23.2年であった。受診間隔は3か月ごとが48.1%で一番多く、服薬ありが85.3%であった。

## 【考察】

幼少期から内分泌・代謝科に通院している患者は、30歳を超えても小児専門病院に通院していることが示された。全体の1/4は大学まで通い、会社員として半数近くが働いており、病気を抱えていても会社に勤めることができると示唆された。しかし、受診間隔は3か月ごとが多く、服薬ありが85%を超えていることから通院は欠かせないため会社の理解や協力も必要だが、継続させるためには自己管理が大切である。今後は具体的なセルフマネジメントやセルフコントロール方法等についての研究につなげたい。

## P2-058

## 食物アレルギーのある乳幼児を持つ母親のソーシャルサポート

弓気田 美香<sup>1</sup>、岡光 基子<sup>2</sup>、矢郷 哲志<sup>2</sup><sup>1</sup> 湘南医療大学保健医療学部 看護学科<sup>2</sup> 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 小児・家族発達看護学分野

## 【目的】

食物アレルギー(以下FA)有病率は保育所を対象とした調査で5.1%であり増加傾向にある。根治的な治療は確立されておらず誤食しないよう環境調整が必要となり、母親の育児ストレスが高まる可能性がある。ソーシャルサポートは育児ストレスを緩和することが知られており、FA児を持つ母親のソーシャルサポートをFAではない児の母親と比較しその特徴を明らかにすることで、今後のFA児とその母親への支援方略を示唆する一助となると考える。

## 【方法】

FAと診断されている0～5歳の子どもを持つ母親248名とFAと診断されていない子どもの母親250名を対象とした質問紙による調査を行った。質問紙は、属性、育児ストレス(日本語版PSI育児ストレスインデックス(以下PSI))、ソーシャルサポート(PSI付属のソーシャルサポート(以下SP))とした。分析には、SPSS25.0を使用し、記述統計、2群間の比較をt検定、SPを従属変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)、PSIとSPとの関連をPearsonの相関係数を算出した。有意水準は5%未満とした。本研究は東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

FA児の母親のSPはFAではない児の母親より有意に低く( $t = 2.212, p < .05$ )、さらに下位尺度の「両親親戚のサポート」( $t = 2.159, p < .05$ )と「近所の人のサポート」( $t = 2.00, p < .05$ )においても有意に低かった。SPを従属変数とした重回帰分析の結果は、FA群では「子どもの月齢」( $\beta = -.187, p < .01$ )「アトピー性皮膚炎の有無」( $\beta = -.153, p < .05$ )が有意な変数であったのに対して、FAでない児の母親では「アトピー性皮膚炎の有無」( $\beta = .167, p < .05$ )のみが有意な変数であった。ソーシャルサポートと育児ストレスの相関では有意な負の相関関係( $\gamma = -.440, p < .01$ )が示された。

## 【考察】

FA児の母親のソーシャルサポートはFAでない児の母親と比較して有意に低く、両親親戚や近所の人のサポートが得られにくい可能性が示唆された。また、FAではない児の母親では子どもの月齢とソーシャルサポートは関連していないのに対して、FA児の母親では子どもの成長とともに低下しており、外出の機会が増えることや幼稚園や保育所への通園が始まることと関連している可能性があると考えられる。アトピー性皮膚炎の有無との関連も示唆されており、今後はFA児の母親の育児ストレスを低減するために、どのようなサポートが有効であるかをさらに調査する必要がある。